

天声人語

中国大陸で死線をくぐり抜けた兵士2人が、東京の闇市で再会する。天地が入れ替わったかのような世間の急変に惑う元軍曹と一等兵。今年の手塚治虫文化賞（新生賞）の受賞が決まった

漫画『あれよ星屑』は、焼け跡の空気を濃く伝える▼戦中戦後を知る世代の漫画家なのかと思いつつ読んだが、作者の山田参助さんは高度成長の末期に生まれた46歳。「子どものころ、松谷みよ子さんなどの児童文学に書かれた戦中戦後の描写に触れました。その後、当時を描いた映画を多く見て、田中小実昌さんや野坂昭如さんの小説を愛読しました」と話す▼描写は丹念である。当時の軍装を調べ、部隊の人数などは元自衛官に確かめた。必要なセリフには中国語やハングルを添えた。街並みを描くには当時の報道写真が役立つたという▼描き出されるのは、人々が背負ったそれぞれの業である。戦地で捕虜を処刑した男は、手に残る感触にさいなまれる。夫に先立たれた妻は窮乏のあまり売春に走る。なりふり構わず必死に生き抜いた世情が浮かぶ▼しばしば敗戦により価値観が一夜で逆転したと語られるが、やはり人の心はそれほど軽くはない。当時はだれもが「戦中」をひきずり、あえぎながら「戦後」を生きたのだろう。読後感は重くて深い▼単行本全7巻。各章各ページから占領下の怒声や泣き声、笑い声が聞こえる。復員兵の葛藤を軸に実写化されそうな気がするものの、できればこの漫画の質感のまま作品世界に浸り続けたい。